

今昔物語集における【ただ】【動詞】に【動詞】型表現形式の運用法

——その意味的特質との関連から——

島 田 康 行

1・1 「ただ過ぎに過ぐ」のような、【ただ】【動詞】に【動詞】という形式の表現が、中古・中世の物語・日記・随筆・説話などに広く現れる。中でも今昔物語集には他に類を見ないほど用例が多く、この説話集の特徴的な語法のひとつと見なされている⁽¹⁾。また、山口康子は一連の論考の中で、今昔物語集におけるこの形式の外形的特徴を、次のように指摘する。すなわち、原則として「出典文献の表現とは関係なく」地の文に用いられ「二に上・下接する動詞は意味的に来往動詞か状態の変化を示すものに限定され」「直接話法の会話文を吸着している」⁽²⁾。

小稿の筆者は、今昔物語集における【ただ】【動詞】に【動詞】型の表現の例から、さらにひとつの外形的・客観的な事実を帰納し得ると考える。その事実は、今昔物語集におけるこの表現形式の用法が、それ以前の作り物語や歴史物語などにおける用法とは明らかに異なる一面を有することを示しており、また、この形式によって表現する、そのこと自体の意味を考える上で、重要な示唆を含んでいると考えられる。はじめにその事実を示し、問題の所在を明らかにしておく。

1・2 今昔物語集には、【ただ】【動詞】に【動詞】型の表現が92例見出せる⁽³⁾。まず2例を挙げる。

a 大臣ノ宣ハク「我レ、此兒ニ目ヲナム見合マジキ。親子ノ契ナレバ、年経テハ行キ合フ事有トモ、忽ナム見ジキ。速ニ乳母ノ家ニ将行テ置タレ」トモ。只出シニ出シ給ヘバ、乳母ト、人車ヲ借テ、糸心地漣テ、奇異シト思テ、物モ取り不敢ズシテ泣キ若君ヲ具シテ出ヌ。
(巻十九 依小兒破硯待出家語第九)

b 見レバ、若キ男也、侍ナメリト見エ、登照、前ニ呼ビ居ヘテ云ク「其ヲ呼ビ聞ヘツル事ハ、夜前、笛ヲ吹テ過ギ給ヒシニ、命、今明ニ終ナムズル相、其笛ノ音ニ聞ヘシカバ、其事告申サムト思ヒシニ、雨ノ痛ク降シニ、只過ギニ過ギ給ヒニシカバ、否不告申デ、極テ糸惜ト思ヒ聞ヘシニ、今夜其笛ノ音ヲ聞ケバ、遙ニ命延給ヒニケリ。今夜何ナル勤カ有ツル」ト。

(巻二四 僧登照相倒朱雀門語二一)

この2例は、【に】に下接する「動詞」が尊敬の補助動詞「給フ」をともなっている点で共通する。そして今昔物語集の92例のうち

ち、「動詞」がこの「給フ」をともなう例は他にはない。また「セ給フ」あるいは「ル・ラル」をともなう例もなく、「動詞」部分に「召ス」「仰ス」などの尊敬語が用いられる例も皆無である。したがって、今昔物語集における【ただ「動詞」に「動詞」】型の表現は、原則として、その動作・行為などの主体に対する「尊敬」表現をともなわずに使用されていると言える。⁽³⁾

さらに1例を挙げる。

c 女ノ云ク「其ノ人ハ返リ給ケルヨリ、物モ不思エズ、只死ニ死ヌル様ニ見ケレバ『何ナル事ノ有ツルゾ』ナド人々被問ケレドモ、物ヲダニ否不宣ザリケレバ、主モ驚キ驢テ、知ル人モ无キ人ニテ有レバ、仮屋ヲ造テ被出タリケレバ、程モ无ク死給ヒニケリ」ト云フヲ…。

(巻二七 正親大夫□若時値鬼語第十六)

このcとbとの2例が、会話文中にこの表現形式が現れる例の全てである。ただし、bについては引用部分の直前の地の文に「雨ハ痛ク降ルニ、笛吹ク者只過ギニ過タレバ、不云シテ止ヌ。」とあり、この表現をそのまま承けたものとも考えられる。いづれにせよ、先に引用した山口の指摘にもあるように、今昔物語集における【ただ「動詞」に「動詞」】型の表現は、ほぼ地の文専用に使われると言つてよい。

この形式の表現に会話文中の用例が少ない傾向は、源氏物語や栄花物語にも指摘できるが、それが「尊敬」表現をともなわないという点は、この表現形式の使用が活発化した宇津保物語や落窪物語、比較的用例の多い源氏物語や栄花物語には見られない事象である。⁽⁵⁾

ここまで指摘し得た事実をまとめれば、今昔物語集における【ただ「動詞」に「動詞」】型の表現は地の文に集中し、そこで表現される動作・行為などには、原則として「尊敬」表現が適用されていない、ということになる。

そして、本集におけるこの形式の表現が、各説話の出典文献の表現に拠つたものでない以上、この表現形式と「尊敬」表現とを共存させない用法は、本集にその独自性を認めてよいはずである。これを考えあわせれば、右にまとめた事実も、今昔物語集の撰者によつて、ある人物の動作・行為などの描写に「尊敬」表現の適用が選択されるとき、そこでは【ただ「動詞」に「動詞」】という形式の発動が回避されている、と換言できる可能性がある。本稿は、そのように考えることの妥当性について論ずるものである。

2・1 まず、【ただ「動詞」に「動詞」】型によつて表現される動作・行為などの主体について整理する。92例のうちには人間以外の事物を動作・行為などの主体とするものが26例ある。具体的には、蛇・蜘蛛・馬・狗・狐・瓜など動植物のほか、山・寺・門・板などの無生物や、年月・日・潮といった自然現象などである。これらを除いた66例を調査の対象とし、【ただ「動詞」に「動詞」】型の表現によつてその動作・行為などを描写された人物を、所属する社会階層によつて大まかに分類する。

分類にあたっては、桜井(1966)が今昔物語集の敬語の敬度を調査するために設けたグループ分けを利用することとする。⁽⁶⁾次のごとくである。

I 第I群 天皇・皇族・摂関・大臣
 II 第II群 大納言・中納言・大将・中将など、および僧侶
 III 第III群 第II群に続くもので、大体国司以下
 これにしたがって分類すると、

用例数 「給フ」をとまなう例

I 1 1 (a::地の文)

II 6 0

III 59 1 (b::会話文)

となり、人物を主体とする【ただ「動詞」に「動詞】型表現の大部分、約9割は第III群に属する人物の動作・行為などについて、使用されたものであることがわかる。そして、桜井(1966)の調査によれば「地の文における尊敬語の使用対象の下限は、原則として第II群」であり、この形式によって表現される動作・行為の主体はその分布において、「尊敬語の使用対象」と対照的であると言える。

2・2 次に、第I・II群に属する人物を主体としてこの表現形式が使用された7例について詳しく検討する。7例の内訳は次の通り。

I 1 大臣(巻十九・九)

II 4 僧(巻十四・四四、巻十五・十五、巻十九・十九、

巻二十・三九)

1 高貴な女性(巻十六・二八)

1 上達部達(巻二二・八)

7例のうち4例をしめる僧について見れば、2例に【ただ「動

詞」に「動詞】型表現が発動された段階では、未だその正体が不明であるという共通点がある(巻十四・四四、巻十五・十五)。残る2例は、生前の罪により死んでなお苦患を受けるもの(巻十九・十九)と、「智リ无キガ故ニ」驕慢をなすもの(巻二十・三九)とである。いずれも各説話を通して地の文では「尊敬」表現の適用をもって待遇されていないことが指摘できる。

高貴な女性(巻十六・二八)については、「品不賤ヌ人、忍テ、侍ナド具シテ、歩ヨリ長谷へ参ル有リ」と登場した直後に、「歩ビ極テ只垂ニ垂居タル」と件の表現形式が現れる。供の人々の会話中では、きわめて敬度の高い「セ給フ」をもって待遇されており、この女性の「品不賤ヌ」素性を垣間見ることができ、が、「只垂ニ垂居タル」という表現はこの会話に先行する部分に使用されている。素性に関する情報が乏しい段階で件の表現形式が使用される点は、僧の2例と共通しているとも言える。そして、この女性も地の文では「尊敬」表現の適用をもって待遇されていない。

右に見た5例の人物は、分類上はIIに属すると判断されるものの、実際には地の文において「尊敬」表現を一度も適用されていない点で共通する、「尊敬語の使用対象」には相当しない人物ということになる。

2・3 残る2例、「大臣」(巻十九・九)と「上達部達」(巻二二・八)は、右の5例と比較すると社会的身分も格段に上位であり、特に「大臣」は地の文において常に「尊敬」表現の適用をもって待遇されている。「上達部達」にも説話の前半では、

左大臣一行として「給フ」が使用されており、撰者にとつては、両者ともに「尊敬」表現の適用が意識される対象であると言えるだろう。右の5例とはその点において隔たりがあり、集中の【ただ】（動詞）に【動詞】型の表現92例中でもきわめて例外的な用法であると言わねばならない。この2例について、件の表現形式が発動された状況を検討する。

「大臣」

a 大臣ノ宣ハク「我レ、此兒ニ目ヲナム見合マジキ。親子ノ契ナレバ、年経テハ行キ合フ事有トモ、忽ナム見ジキ。速ニ乳母ノ家ニ将行テ置タレ」トモ。只出シニ出シ給ヘバ、乳母ト、人車ヲ借テ、糸心地澆テ、奇異シト思テ、物モ取り不敢ズシテ泣キ若君ヲ具シテ出ヌ。

（卷十九 依小兒破硯待出家語第九）

前述の通り、地の文の用例中唯一「給フ」を下接する例である。「大臣」（小一条左大臣師尹）家に代々伝わる家宝の硯を、仕えていた若い男が誤って割ってしまう。この男をかばってその罪を被った大臣家の若君を、激情に駆られた「大臣」が追いつ出してしまふ場面である。若君はこの後、高熱によって重態に陥るが、話を聞いて嘆き悲しむ主上をよそに、当の「大臣」は「此ル次ニ死ヌ、吉キ事也」と肉親にあるまじき態度を取り続ける。硯を惜しんで元服前の我が子を放逐する「大臣」の行為は、倫理的・社会的に常識の枠を大きくはずれるものである。そして件の表現形式は「大臣」がまさに若君を放逐する部分に使用されている。

「上達部達」

d 此クテ既ニ返リ給ヒナムト為ルニ、大納言、大臣ニ申シ給ハク、「痛ク酔セ給ヒニタメリ。御車ヲ此ニ差シ寄セテ奉レ」ト。大臣宣ハク、「糸便无キ事也。何デカ然ル事ハ候ハム。痛ク酔ヒナム、此ノ殿ニ候ヒテ酔醒テコソハ罷出メ」ナド有ルニ、他ノ上達部達モ「極テ吉キ事也」トテ、御車ヲ橋隠ノ本ニ只寄せニ寄スル二程ニ、曳出物二極キ馬二疋ヲ引タリ、御送物二箆ナド取出タリ。（卷二二 時平大臣取國經大納言妻語第八）

大納言（國經）邸を訪れた左大臣（時平）が暇を申し出ると、大納言は、車を寢殿正面階段前の車寄せに寄せるように言う。左大臣は辞退するが、供の「上達部達」は橋隠の下に「只寄せニ寄」せてしまった、という場面である。大納言は左大臣の伯父に当たるが齢すでに八十、左大臣の訪問が、自分の妙齢の妻を狙つてのこととも知らず欲待し、挙げ句に妻を奪われてしまう、というのがこの説話の大筋である。車を寄せるようにという申し出も、伯父とは言え下位者である大納言邸をわざわざ訪れた一の大臣に対する特別の配慮であつた。大臣が「便无キ事」としてこの申し出を辞退したのは、もうひとつの「特別の配慮」を、すなわち「心殊ナラム曳出物」としての大納言の妻を所望する伏線となつてはいるが、「階の前まで車をつけるのは身分に大差があるか、急病の時とかに限られて」いるという当代の常識を背景とすることに疑問の余地はない。こうした観点から見ると、「吉キ事也」として橋隠の下まで車を「只寄せニ寄」せてしまふ供の「上達部達」の行為はきわめて異例、非常識的であり、彼らの属する社会における行動規範からの逸脱と言う

ことができる。

「大臣」「上達部達」の両者が【ただ「動詞」に「動詞」】型の表現をもつて描写された行為は、何らかの意味で非常識的な、規範からのいちじるしい逸脱である、という共通点を有している。ただし、この上達部たちに対しては、説話の前半部に、左大臣一行として「給フ」が一度使用されているものの、「各目ヲ食セテ、或ハ出ヌ、或ハ立隠レテ」のように「尊敬」表現の適用がない場合もある。常に「尊敬」表現の適用を受ける「大臣」とは、その待遇において、なお差があると言わねばならない。

一方、唯一「給フ」を下接する形で件の表現形式が発動された「大臣」は、「小一条左大臣師尹」という固有名により實在の人物として特定可能である点でも、「上達部達」をはじめ、IIの用例の人物とは異なるのであるが、そのことはまた後に触れる。

ここまでの考察を整理してみれば、今昔物語集中の【ただ「動詞」に「動詞」】型の表現形式は、原則として、地の文において「尊敬」表現が適用される人物を主体として発動されることがない。かかる主体の行為が、何らかの意味で非常識的、規範からのいちじるしい逸脱である場合には、例外が発生するが、希である、ということになる。

そして、今昔物語集とほぼ同時代の成立と見られる古本説話集・打聞集にも、それぞれ8例（今昔物語集との同文話を除けば4例）・3例の【ただ「動詞」に「動詞」】型表現を見出すことができるが、右に見た件の表現形式における主体の偏りは、そのまま当てはまって例外はない。さらに鎌倉時代まで下って、宇治拾遺物語・発心集についても同じことが言える。宇治拾遺

物語には26例（今昔物語集・古本説話集との同文話を除けば12例）と例が多いが、「尊敬」表現をとまなう例はない。

2・4 この表現形式に「尊敬」表現を共存させない用法は、実は、今昔物語集以前に、すでに枕草子にその萌芽とも言うべき傾向を認め得る。用例の総数や徹底度において、今昔物語集の独自性は揺るがないが、枕草子に見える件の表現形式の用法は、今昔物語集中のそれと類似の一面をもつ。すなわち、【ただ「動詞」に「動詞」】型の表現18例のうち、人間以外の事物（犬・齢・海面など）を動作・行為の主体とするもの5例、下衆・従者クラスの人物を主体とするもの6例などに対し、地の文において「尊敬」表現が適用される人物を主体とするものは、次の「藤三位」の1例に過ぎない。

e 上の「このわたりにみえし色紙にこそ、いとよくにたれ」とうちほゝへませ給て、いま一つ御厨子のもととなりけるをとりて、さし給はせられたれば、「いであな心う。これ、おほせられよ。あな頭いたや。いかでとくきゝ侍らん」と、たゞせめにせめ申、うらみきこえて笑ひ給に、やうくおほせられいで、使にいきける鬼童は、台盤所の刀自といふものものとなりけるを、小兵衛がかたらひいだして、したるにやありけん」など、おほせらるれば、宮も笑はせたまふを、ひきゆるがしたてまつりて、「など、かくは、はからせをはしまししぞ。…」（一三一段）

「藤三位」は、藤原師輔の四女繁子で一条帝の御乳母とされ

る人物である。ここでは帝にからかわれた「藤三位」が、そのことで帝・宮を責めている。うちとけた雰囲気ではあるが、帝を「たゞせめにせめ申」し、宮を「ひきゆるがしたてまつり」など、御乳母という言葉わば「身内」である「藤三位」だからこそ許される行動である。その様子が「ねたがりゐ給へるさまも、いとほりか」なのも、その点に根ざしている。逆に言えば、彼女の行動は一般の「身内」などの特別な関係にない―貴族たちにとっては到底考えられない、という意味で非常識的ということになるだろう。この「藤三位」の例は、この点で今昔物語集の「大臣」や「上達部達」の例と、きわめてよく似ていてと言える。また、この「藤三位」だけが、枕草子の地の文の用例中、動作・行為の主体が個人として特定できる例であることもあわせて指摘しておく。^⑩

3・1 右のように、【ただ「動詞」に「動詞」という形式でその動作・行為を表現される主体の身分的な偏りは、今昔物語集に最も顕著に見られるほか、いくつかの説話集、さらに枕草子にも指摘し得る。このような偏りが生じた理由の究明のためには、この形式によって表現すること自体の意味について、あらためて考えてみる必要がある。

枕草子に次の一段がある。全文を引用して示す。

f たゞすぎにすぐる物 帆かけたる舟。人のよはひ。春、

夏、秋、冬。

(第二四一段)

作者にとつて、ここに挙げた事物は、「たゞすぎにすぐ」と【ただ「動詞」に「動詞」】型の形式によって表現することこそが相

応しいと感じられる事物なのである。とすれば、短い章段ではあるが、この一文は【ただ「動詞」に「動詞」という表現形式によって表現することの意味がもつとも端的に現れている、あるいは、この表現形式によって表現することではじめて、自分の真意を表し得ると考えられた文の例として、重視しなければならない。

では、ここでの「たゞすぎにすぐる物」はどのように解釈するのが妥当であろうか。諸注釈書の解釈は「ただもう過ぎる一方のもの」(日本古典文学大系)「一方的に過ぎ去るもの。もどることもとどまることもない有様が「ただ過ぎ」」(新日本古典文学大系)「ただもうむやみに過ぎて行くもの。ここでは知らぬうちに過ぎ去って行つたのに気がついて驚く、といったものをあげてある」(日本古典文学全集)「とどまるところなく経過してゆくもの」(萩谷 1983)「どんどん早く過ぎ去るもの」(田中 1983)などとそれぞれに微妙な差違があつて一様でない。

また「人のよはひ。春、夏、秋、冬」と並んで挙げられた「帆かけたる舟」については、両者の取り合わせの妙を指摘する田中(1983)以外には、「人の漕ぐ舟に対して言つたもの」とする新日本古典文学大系の言及があるのみである。しかし、幾多の過ぎゆくものの中から積極的に「帆かけたる舟」が採用されていることも「たゞすぎにすぐ」の解釈には見落とせない意味をもち、つはざであり、この指摘は重要である。では、帆をかけた舟が、人の漕ぐ舟と最も明白に違っている点はどこだろうか。人の漕ぐ舟より速度が速いとは一概に言えないだろうし、目的地がある以上、決してとどまることがない、というのもそぐわないよ

うに思われる。「帆かけたる舟」の、人の漕ぐ舟と比した場合の最も顕著な特徴は、その航行が風力に依存していること、風という人の意思の及ばないものに全面的に左右されることではないだろうか。年齢や季節も、その経過や推移に人の力が関与することができないという点では同様である。

「帆かけたる舟」が「人の漕ぐ舟に対して」言われたものとすれば、この章段で作者が強調しようとするのは、「帆かけたる舟。人のよはひ、春、夏、秋、冬」の過ぎ方には中断・遅滞がないという、その過ぎ方の絶え間ない様子や早さではなく、むしろ、それらの過ぎることを「とどめようとしてもとどめようがない、自分の意思ではどうすることもできない」という思いではないだろうか。つまり、「帆かけたる舟。人のよはひ。春、夏、秋、冬」という主体が、それを目の当たりにする、あるいはその中で生きる作者の意思が及ばないところで「過ぐる」ことに、作者の感興の焦点はあるように思われる。^①そして【ただ「動詞」に「動詞」という表現形式は、それを強調する有効な手段のひとつとして選択されたものと考えられる。

これまでに挙げたa～eの例も、【ただ「動詞」に「動詞」という形式で表現された行為・動作は、いずれも関係者の意思や反応、あるいは常識や規範といった自らの行動を規制する枠など、周囲の状況には関わりなく行われていると言うことができる。それらの行為・動作は、時に乳母(a)・登照(b)・女(c)などの関係者が為すすべもなく立ちつくすところとなった。

3・2 前節での考察から、【ただ「動詞」に「動詞」】型の

表現の特質は、その行為・動作などが、関係者の意思や反応あるいは周囲の状況とは無関係に行われることを強調する点にあると考えられる。これは副詞「ただ」の「ひたすら」という本来の意味から考えても、無理のない解釈であると思われる。

山口(1974)は、今昔物語集における「同一動詞反復形式」が「その行為・動作・作用の結果が主体もしくは関係者にとつて不愉快・迷惑・困難・不幸であるもの、又はそういう状態の原因となるもの、の表現に主として用いられている」ことを指摘するが、【ただ「動詞」に「動詞」】型の表現の特質を右のように考えると、その行為・動作などの結果が「関係者にとつて不愉快・迷惑・困難・不幸」を招来しやすいことにも説明が付く。

また、【ただ「動詞」に「動詞」】型の表現が動詞の表す動作・作用のどのような局面を強調しているのかを動詞の種類別に考察した近藤(1994)は、「動作の停滞や中断をもたらし得るような要因の存在にもかかわらず、なお動作が継続・反復する」と解せる例、「状態の招来が他人に阻止される等せず、ただちに実現される」と解せる例を挙げ、それぞれ「動作が、中断や停滞することなく継続・反復することを強調的に表す」、状態の招来の「実現の早さ」を強調的に表す、とするが、これらもむしろ「動作の停滞や中断をもたらし得るような要因の存在にもかかわらず」「他人に阻止される等せず」の部分が強調されたと考えて無理がない。例えば、

g 「圓融院の、むらさいの、子日の日、曾禰好忠いかに侍ける事ぞ」といへば、「それ／＼、いと興に侍りし事也。さばかりのことに上下をえらばず和哥を賞せさ

せ給はんに、げにいらまほしきことにはべれど、かくろへにて優なる哥をよみいださんだにいと無礼に侍へるべき。ことに、座にたゞつきにつきたりし、あさましく侍りしことぞかし。

(大鏡 第六卷)

右の例においても、作者が「たゞつきにつきたりし」で表現しようとしたのは、曾丹の着座がただちに実現されたという「実現の早さ」よりも、召人ではないことなどに関係なく座に着いてしまったことや、その結果がもたらした居合わせた人々の困惑であると考えられる。

さらに、栄花物語には生後間もない姫宮が笑う様子や、抱かれるままに寄りかかる様子の描写に【ただ「動詞」に「動詞」】型の表現が用いられた例がある。これも、そもそも乳幼児は、周りの大人から見れば、関係者の意思や反応または周囲の状況を理解し得ない存在であることによると考えられる。同様の例は宇津保物語にもあり、当歳の今宮が「ただ笑ひに笑ふ」様子を「無心に、無邪気に笑う」様子とする山口(197b)の解釈は当を得たものと言える。

4 この表現形式の意味的特質を右のように考えたとき、表現される主体の偏りとの関係については、次のような解釈が可能になる。

動作・行為などが関係者の意思や反応または周囲の状況と無関係に行われる場合、その結果が関係者の不愉快・迷惑・困惑などを招来しやすい、と考えることには一応無理がないと考えられる。この条件と結果との結びつきはもちろん普遍的なもの

ではない。

一方、件の表現形式と、関係者の不愉快・迷惑・困惑などの結果との結びつきは、宇津保物語・栄花物語に乳幼児が「ただ笑ひに笑ふ」例が散在することからも普遍的なものではないと知られるが、右に述べたこの表現形式の意味的特質は、そのような結果と結びつきやすい、言わば親和性をもっている。その親和の強さは、この表現形式がいかに運用されるかによつて左右されるはずであり、親和を進めるために、一定の条件の下で運用することも可能である。例えば、関係者の不愉快・迷惑・困惑などの結果がもたらされる文脈に限って発動することで、両者の結びつきは密接なものになるだろう。今昔物語集において件の表現形式が、特定の結果と強く結びついているのは、そのような「運用」の結果と考えることができる。

一般に、関係者に不愉快・迷惑を及ぼすような動作・行為をそれとして描写することは、その動作・行為に対する批判的なニュアンスをともなうことになるだろう。表現者にとつて、ある動作・行為が、「尊敬」表現を適用して表現すべきものであると同時に、批判的なニュアンスを込めて言及すべきものであることも、希ではないかも知れないが、実際の表現に際してはそれがためらわれ、憚られる場合があることも想像に難くない。今昔物語集の中で、件の表現形式が、関係者の不愉快・迷惑・困惑などの結果との強い結びつきを指向して運用されるならば、その発動には批判的ニュアンスを躊躇なく表明できる対象が選ばれるのではないだろうか。逆に、撰者から見てある動作・行為が、「尊敬」表現を適用して表現すべきものである場合、その

ことはこの表現形式の発動を回避する要因として撰者の意識に上ったのではないだろうか。

このような運用法が徹底された場合、例外的な運用例は、逆にきわだった意味をもつことになる。今昔物語集では「尊敬」表現の適用が意識されるような、そして実際に「尊敬」表現をもつて待遇されている主体の動作・行為に伴う表現形式を例外的に発動することで、その動作・行為の非常識的な、いちじらしい逸脱としての側面が強調されている。特にその主体が固有名によって特定される「左大臣師尹」の場合にはその効果も殊更である。因みに師尹は、安和の変で源高明を陥れた主謀者に擬せられ、左大臣就任後半年で薨じたのも高明の祟りであると噂になった、後世の評判も芳しからぬ人物であった。

枕草子の用例における主体の偏りも、この表現形式が、不愉快・迷惑などの結果と延いては批判的なニュアンスと結びつきやすいことと無関係ではないと思われる。自らの行動を自嘲ぎみに表現するに用いた例が2例あるのは、その裏返しと言えるだろう。そして唯一の例外である「藤三位」は、清少納言にとってある種の侮蔑感をともなう想起される人物であったことが指摘されており、彼女に対する「尊敬」表現が章段中で隠現していることも、このことと関連して見落とせない事実である。

以上、今昔物語集における【ただ「動詞」に「動詞」】型表現形式の運用法について、この表現形式の意味的特質との関連から考えてきた。宇治拾遺物語など、漢字文系以外のいくつかの説話集にも、今昔物語集と同様の主体の偏りが見られることは、

右に述べたような運用法の広がりとの関連において示唆的であるが、今はそれについて詳述する準備がない。歴史物語や作り物語における運用法の問題と併せて今後の課題としたい。

1 注

日本古典文学大系「今昔物語集 三」の解説は、この表現形式が巻十六に集中して見えることを指摘し、「その和文脈的な、また新興の語法なることを十分に思わしめる」とする(p.28)。また佐藤(1967)は、この表現形式を和文体に特有のものとし、巻十六中では出典を明確にしない話群に集中することを指摘する。

2

山口(1975a)による。「連の論考」(1974、1975a、1975b、1976、1978a、1978b)は、いずれも「に」を介する同一動詞反復形式」を広く考察の対象とするものであるが、今昔物語集では、それが「原則としてタダを伴う」とがかわせて指摘されている。さらに山口(1974)は、この形式が「その行為・動作・作用の結果が主体もしくは関係者にとって不愉快・迷惑・困難・不幸であるもの、又はそういう状態の原因となるもの」の表現に多用され「何らかの意味で破局性をもった場面」の表現であると述べる。

3

【ただ「動詞」に「動詞」】という典型的な形のほかに、【動詞+助動詞】を反復するもの(例:「只被引ニ引レテ」二六卷二三)、「複合助動詞」を反復するもの(「只引入ニ引入レツ」二八卷三七)、「に」の下に中間項をもつもの(「只曳キニ東ノ方へ曳行ケバ」十六卷三三)、希に【形容(動詞)】を反復するもの(「只近ニ近ク成テ」二六卷十七)、などの variation をも含めている。一方【ただ】を上接しないもの、【ただ】以外の「弥」などを上接するものは除いている。

4

付言すれば、bの例の「給フ」は僧「登照」から「若キ男」に向けられたものであるが、「若キ男」の「登照」に対する発話の中には「候フ」が使用されている。したがって「登照」は「若キ男」との関係においておそらく上位であり、この「給フ」の敬度も低いと考えられる。

5

別掲「表1」参照。作品別の全用例数(左欄)と「尊敬」表現を伴う用例数の一覧を示す。括弧内は会話文中の用例数である。

竹取物語	2 (0)	0 (0)
篁物語	0 (0)	0 (0)
伊勢物語	1 (0)	0 (0)
土佐日記	0 (0)	0 (0)
平中物語	0 (0)	0 (0)
大和物語	0 (0)	0 (0)
蜻蛉日記	5 (0)	0 (0)
宇津保物語	26 (10)	13 (2)
落窪物語	19 (4)	6 (3)
枕草子	18 (1)	0 (0)
和泉式部日記	1 (0)	1 (0)
源氏物語	19 (1)	7 (1)
紫式部日記	1 (0)	0 (0)
大鏡	1 (1)	0 (0)
栄花物語	26 (1)	10 (0)
堤中納言物語	0 (0)	0 (0)
夜の寝覚	8 (3)	3 (1)
更級日記	2 (0)	0 (0)
浜松中納言物語	2 (0)	0 (0)
狭衣物語	5 (0)	2 (0)
讃岐典侍日記	3 (0)	3 (0)
今昔物語集	92 (2)	2 (1)

桜井(1966)にはさらに「IV 第IV群」として「その他である。たとえば、仏神、通行中・旅先などでの関係、特別な利害関係、肉親・男女関係など」がある(凡例p.6)。しかし、ここでは66例中65例が地の文の用例であり、このような特別な関係を考慮すべき例は「b」の1例に事実上限定されるため、三分類とした。

桜井(1966)の分類でもIIに整理されている。

日本古典全書『今昔物語集 四』(朝日新聞社 p.151注

萩谷(1982)は、御乳母説を否定した上で「御乳母ではなくても…前典待として、一条天皇・中宮定子双方に対する大叔母として…定子立后と共に、そのお目付役の如き立場で内裏に局住みしていたのであろう」(p.265)とする。どちらにせよ帝・中宮とは特別な関係にあったと言える。

ただし作者自身の行動について「たゞ寝に寝いりぬ」(二二一段)と使用した例がある。ほかに会話文中の用例では、左衛門の尉則光が「和布のありしをとりて、たゞくひにくひまぎらはし」(八〇段)と、やはり自分の行動について使用した例がある。

前段との関連についても、前段「さかしきもの」の「無思慮・無分別に

べらべら喋る「さかしさ」(萩谷(1983) p.479)から、自分の意思と無関係に過ぎてゆくものへの連想と考えることが可能である。

山口(1974)の整理に拠れば、関係者にとって好ましい結果と結びついた例は4例にとどまる。このうち人物を主体とするのは、後に国王となる天竺の「端正美麗ナル男子」の1例(五巻一七)のみである。

注10参照。なお全用例中には「蟻は：たゞあゆみにあゆみありくこそ、をかしけれ」(四〇段)のように、関係者の不愉快・迷惑などと結びついているとは見なし難いものが数例あり、この表現形式と特定の結果との親和は抑制されていると言える。

14 萩谷(1982) pp.262-264

引用文献

近藤(1994) 近藤明「強調」の「動詞+二十動詞」型—φ型と「イヤ—」

「タダ」—」(『語源探究 4』pp.17-40 明治書院 平六

桜井光昭『今昔物語集の語法の研究』(明治書院 昭四一

佐藤武義『今昔物語集卷十六の文章』

「山形女子短期大学紀要」第1集 pp.45-83 昭四二・三

田中重太郎『枕冊子全注釈 四』(角川書店 昭和五八

萩谷朴『枕草子解環 三』(同朋社出版 昭五七

萩谷朴『枕草子解環 四』(同朋社出版 昭五八

山口康子『今昔物語集の同一動詞反復形式管見—「に」を介する形式について—』(『語文研究』第三十七号 pp.27-38 昭四九・

山口(1974) (『語文研究』第三十七号 pp.27-38 昭四九・

八 (1975 a) 同「上代における同一動詞反復形式—「に」を介する形式の成立要因について—」(『長崎大学教育学部人文科学研究报告』第

二四号 pp.19-29 昭五〇・三

(1975 b) 同「二」を介する同一動詞反復形式の史的考察—今昔物語集ま

で—」(『語文研究』第三九・四〇号 pp.11-20 昭五〇・六

同「二」に」を介する同一動詞反復形式の流動—「いや」から—た

だ「へ—」(『長崎大学教育学部人文科学研究报告』第二五号

23-33 昭五一・三

(1978 a) 同「同一動詞反復形式の通史的考察」「に」を介する形式の変
転」(『長崎大学教育学部人文科学研究報告』第二七号 pp.19
-35) 昭五三・三

(1978 b) 同「に」を介する同一動詞反復形式の表現価値―その通史的考
察の試み―(『春日和男教授退官記念 語文論叢』pp.273-293) 昭
五三・十一

【使用本文及び索引類】(大系)『日本古典文学大系』新大系『新日本古典文学
大系』

「竹取物語」上坂信男編『九本対照竹取物語語彙索引』(『篁物語』小久保崇明
編『篁物語校本及び総索引』「伊勢物語」大野晋他編『伊勢物語総索引』+大
系「土佐日記」小久保崇明他編「土佐日記本文及び語彙索引」)「平中物語」曾
田文雄「平中物語」研究と索引「大和物語」塚原鉄雄他編「大和物語語彙
索引」+大系「蜻蛉日記」佐伯梅友他編「かげろふ日記総索引」(『宇津保物語』
宇津保物語研究会編『宇津保物語本文と索引』+大系「落窪物語」松尾聰・江
口正弘編『落窪物語総索引』+大系「枕草子」新大系「和泉式部日記」東節夫
他編「和泉式部日記総索引」)「源氏物語」源氏物語大成(紫式部日記)新大系
「大鏡」大系「栄花物語」高知大学人文学部国語史研究会編「栄花物語本文
と索引」(『堤中納言物語』森口年光著『堤中納言物語総索引』)「夜の寝覚」阪
倉篤義他編「夜の寝覚総索引」+大系「更級日記」東節夫他編「更級日記総索
引」(『浜松中納言物語』池田利夫編『浜松中納言物語総索引』+大系「狭衣物
語」塚原鉄雄他編『狭衣物語語彙索引』+大系「讀岐典侍日記」日本古典文学
全集「今昔物語集」馬淵和夫監修・有賀嘉寿子編「今昔物語集自立語索引」+
大系「古本説話集」新大系「打聞集」中島悦次「打聞集」(『宇治拾遺物語』境
田四郎監修『宇治拾遺物語総索引』+大系「発心集」高尾稔他編「発心集本文・
自立語索引」

※引用に際しては一部表記を改めたところがある。

(しまだ やすゆき 文部省教科書調査官)